

広島俳句倶楽部

令和二年二月作品集

西国街道草津宿 暁子

広島市西区の草津は、古来より西国街道の宿として、また、漁港として賑わってきた所だ。時代とともに変化はしてきたが、狭い路地を挟み、数多の社寺とそれらを囲むように町屋が並び、今でも、その名残を見ることができる。また、宮島を一望できる古城社もあり、街並み保存地区に指定されている。

冬菊や干満のある川に沿ひ

笹鳴の竹林を抜け城の跡

寒椿草津城址に海を見て

雪ばたる武者隠しとふ路地のあり

歳晩の湯気の立ちたる蒲鉾屋

沈めたる牡蠣殻に魚群れるたり

埋め立ての汀を走り夕千鳥

釣舟に松一本の飾かな

臘梅の匂ふ十字路とほりたる

河口より見ゆる社や寒日和

竹林に風吹いてゐる大旦

あらたまのまだまだ伸びる竹の節

元日の日差に落景あたたまる

二日はや山に鴉の餌せり

石段を上り冬木に近づきぬ

花八つ手遠き場所へと日のあたり

日輪は西へと巡り枇杷の花

臘梅に赤子の重さありにけり

寒菊に近づいて去る人の声

町角にふと水仙の香りたる

佐保光俊

冬の日の日照雨の光の新校舎

摘みたての水仙の香の部屋に満つ

景牡丹の影の濃くなる日差かな

土の香を反かに感じ雨水かな

石垣の中に白梅咲いてをり

早春の路地に入声してゐたり

濡れながら歩いてゐたり木の芽雨

温き日の朝にまんさく咲きにけり

学生の部活の声や下萌ゆる

古草の穂を靡かせて風の吹く

村上正人

声出して竹踏みするや窓の雪

いろいろな鳥声のなか畑を打つ

梅真白町内会の清掃日

梅林に歌つてゐたる少女かな

雛巡りそぞろ歩きの嚴島

露天湯に浮かす両足春の雪

点滴をじつと見てゐる春の雪

春の月青き輪郭ありにけり

春の月最終便の汽笛鳴る

春月やよく見えてゐる楠の幹

あざみ

初日差すバスで眠れる親子かな

元日の動物園の空真青

寒の空梅檀の枝広がりて

寒の月塾の終はりを待ちをれば

鉛筆に「合格祈願」寒昂

合格の報を待ちたる寒北斗

手降よく烏賊を捌いて冬の夕

焼芋を食うて算数再開す

新しき免許の写真日脚伸び

文具屋であれこれ買うて日脚伸び

里山は冬の霞に包まれて

南天の実のそれぞれに雨霰

寒の雨鵲の大群の飛び立てり

朝の日にかすかに揺る水仙花

寒紅梅枝に雨粒連なりて

遠山の白く煙りて雪しまく

枯葦を揺らして雀飛び立てり

雑木山赤き芽吹の始まりぬ

リハビリの窓に金縷梅見てるたり

下萌や川に釣舟映りたる

一雲の過ぎゆくまでの時雨かな

さざ波が冬の蓮田に立ちにけり

冬の海独歩の旧居より見たる

海鳥の鳴いて飛び交ふ冬日和

梅白し石段高き峽の家

竹林へ野梅が枝を伸ばしたる

苗札を土の匂へる鉢に挿す

舳ひ綱解きし土手に犬ぶぐり

山畑に花菜明りのしてゐたり

野焼の火秋吉台を駆け下る

亜矢

敬子

暁子

顔寄せて香を確かめる冬の薔薇

冬晴の一番遠き山が見ゆ

冬の霧晴れて鴉のよく鳴けり

梅白し静かに雨の降り出しぬ

一輪の梅の白さに雲のゆく

少しづつ開くのが好き梅の花

通るたび白梅の花数へたる

春霞人はいつものやうに行き

椿へと午後の日差のよく届く

終に積もつてゆける春の雪

高尾ひとみ

初夢は三姉妹ゐて賑やかに

母の腕支へとんどを見上げけり

味噌焚の大釜の火が音を立て

ふるさとの同級生と味噌を搗く

寒餅を仏間に並べ干しにけり

母が家に続く坂道雪積もり

庭先の花の蜜吸ふ春の鳥

前山に雉の啼きるる美容院

地藏堂脇に緋桃の咲きにけり

雨の降る雑木林に初音せり

ちどり

大寒の市に来てゐる夫婦かな

悴める指でスマホに触れるたり

鉄棒の霜の早くも溶けにけり

日脚伸び火の見櫓に人のゐて

絶え間なく水の音して日脚伸び

春の雪ふはりふはりと流れたる

けん玉に夢中の童水温む

飯盒の飯の炊けたり春の山

朝の日にタムシバの苞ほくれけり

如月の風を入れたる山家かな

松本恵和

初詣伏見稲荷の列につき

大鉢に景牡丹ふたつ植ゑてあり

沿道の景牡丹の丈同じなり

水仙を束ね花瓶に入れてあり

窓を開け梅の匂の入り来る

窓の外しばし見てゐる梅月夜

垣根越し老梅の香のしてをりぬ

梅園の四方より香り漂ひぬ

春の海一羽の鸞が舞うてをり

赤椿父の書斎に生けてあり

美耶

念仏のときをり聞こえ霜の朝

喪服着て立ち話する冬日向

つかの間を障子に差せる冬日かな

大寒の寝息を傍に聞いてをり

大霜に開け放ちたる御堂かな

ありつたけ臘梅を生け年迎ふ

通りから声のしてゐるお元日

梅匂ふ御堂の普請はかどりて

桑門わかこ

大根焚親子で座る緋毛氈

掘り返す駅前広場檸檬枯れ

団店を明日に控へて室の花

暖房の風にモビール回りたる

店の戸を開け放し売る水仙花

芹を摘む小川の石に足を掛け

歌ひつ生徒の帰る雛の前

新庄憲彦

鴨の群三つに分かれ山を越ゆ

雪の朝カーテン越しの薄明り

窓の雪溶けて雫となりにつけり

どこからか梅の香れる路地に入る

水脈を引き舟の行き交ふ二月かな

それぞれの舟に一人や蜷搔

群生の椿の道のはの暗し

松田裕子

降る雪に訪ねし町の暮れゆけり

大枝を揺らす風あり梅二月

梅香る日向に杖の母の立つ

沈丁に母百歳の笑顔かな

春の山白雲ひとつ流れくる

万華鏡ひとり見てゐる春なかば

井藤希

山茶花の花びらを踏みウォーキング

筏組む竹の青さや冬の朝

滑り台子猫が背中擦りゐたり

薄紅梅段々畑に煙立つ

春の鳥車椅子から見上げたる

猫柳小波を立って手漕ぎ舟

栄吉

老といふ音のなきもの冬さなか

新年は穏やかに晴れ庭仕事

寒晴の浄土に帰る弟か

臘梅の咲き継ぐ通夜となりにけり

位職の人柄偲ぶ寒の明

座禅草けさまた開く寺苑奥

紀英子

瞬いて寺の梟鳴きにけり

初雪や被爆ドームの傍に立ち

寒晴や四月始まりの手帳買ふ

行く道を問ひ交番に水仙花

受験校決めたと電話架かりたる

阿姫

枯葦の節の赤きが流れ着く

飛石の窪みに張れり初氷

寒鯖の酢の匂ひ立つ夕べかな

投げ網の凍る川面に広がりぬ

絹の音させて外せる春シヨール

大橋博子

散歩道鵲鴒が二羽来てるたる

一つつ薄氷を割り登校す

踏切の遮断機上がり冬夕焼

窓越しにクリスマスローズ眺めをり

路の藎見つけて土手に蹴く

風強き中高ふ二月かな

紅の色艶やかに寒椿

蹴く土手の四五個のふきのたう

白梅の蜜を吸うたる目白二羽

観劇の余韻に見上ぐ冬の月

雛見れば母の鉛筆思ひ出す

落椿息急き切つて少女行く

居酒屋の一品土筆の煮付とす

下駄箱の上に置きたる紙雛

巣立鳥鳴きつ宙を飛びにけり

大畑恵

白神陽子

友岡崇山子

自転車の少女のまつ毛雪降り

白酒を温めているネイルの手

昼過ぎの新聞白し春の風邪

黄梅の家へ次々子の帰る

弟のしているバレンタインチョコ

ふじ女

大枯野鳶の舞ふ声高くあり

風花や思はぬ人の手紙くる

水仙の一輪の咲き香りたる

山の中しづかに野梅散りにけり

梅を見て見知らぬ人と話したる

穂高

入口に泥付き大根置かれたる

大根を切つて夕餉の支度せり

子の顔を思うて作る鰯大根

門門に水仙を生け島暮し

菜の花が好きと言うたる父想ふ

宮田保江

土筆摘む電車の過ぎし線路脇

畦を焼く煙流るる雨水かな

離れてはまた繋がりて野火走る

旧道に残る家並の古雛

亀鳴くや真夜に打ちたる古時計

森口良樹

落鮎の薬に来てゐる子どもかな

まどろみの日差遮る冬の雲

沢庵を噛む音のする夕餉かな

富士山の麓ここにもつくしんぼ

英一

水攻めの地の枯蓮を見下ろしぬ

頭上より鳥の鳴き声春近し

落椿踏みて山道歩きたる

山門に紅白梅の古木あり

梅子

スーパーの入口に立ち雪払ふ

竹藪のときにどどどと雪落つる

手で払ふ親鸞像の笠の雪

隣まで孫をおぶうて雪の道

みさ子

ポケットに手を入れ寒さ凌ぐ夜

春の空飛行機雲はビルに消え

白梅が帽子のつばに触れにけり

阿波久

路の臺天ぶらにして客の膳

杖つきて紅梅を見る人の居り

遠来の客に活けたる猫柳

遠藤さつき

水仙のかたまりて咲く道の端

梅の木の花三つ四つ付けてをり

かこ

水湿む同窓の友よく喋り

紅梅の光に上がりて昼の月

熊谷ゆり子

大犬のふぐり川辺を覆ひたる

泉邸の梅の香りのむせるほど

民

着ぶくれて母の見守る野球かな

大試験終へ少年の顔となる

ちかこ

何もなき山寺の梅見頃なり

春時雨散歩の足を早めたる

幹

探梅を逸れて見てゐる干潮かな

盛りなる佗助に門閉ぢてあり

やす保

もの忘れ多き八十路や春の月

津田玲子